

EXPO'70そして関西万博



随 筆

桑 畑 進*

EXPO'70, Now Toward KANSAI Exposition

Key Words: International Exposition, Osaka Exposition, Expo'70, Kansai Exposition, Expo2025

1. はじめに

本原稿の執筆を依頼（暫定）されて承諾したのが5月17日。入稿締め切りが10月11日。「まだまだ先だなぁ。何を書こうかなぁ」と思いながら、出版済の他の方の随筆を読みつつ、時間が過ぎていきました。そして、本稿を書き出した今日は10月9日。昨夜、就寝前に締め切り日を確認して「まずい！」と思い、ベッドの中で依頼されてから5カ月の間、私はいったい何をしていたんだろうか？とあって、真っ先に頭に浮かんだのは「そうだ！関西万博に行ったのだ」でした。夫婦で関西万博の通期パスを購入し、かつ開催前のテストランにも応募して当選したので、4月6日を皮切りに10月7日までに23回行きました。最終日の10月13日も予約していますので、最終的に24回遊びに行く事になります。これを人に言うと、必ずドン引きされます。そして、スタンプ帳（図1）を見せると、呆れられます。ときどき、羨ましがられたり「私は30回以上行った」と自慢し返されたりすることもあります。そういう人たちは筆者級の変わり者です。

本随筆、ご自身の研究や大学での活動等を通じた経験を基に高尚な話を書かれている方が多い中、「こんなふざけた話を書いて良いのだろうか？」と一抹の不安を持ちつつ、しかし、私が阪大工に入学し、2024年3月に定年退職するまで研究を続けることになった動機の大きなひとつが「EXPO'70（日本万国博覧会）」であったので、定年退職して2年目



図1. 関西万博会場（上）と筆者のスタンプ帳（下）

であり、関西万博に通っている今しか書く機会はないと思い、貴重な本誌のページを使わせて頂くことにしました。もし、これを読んで、ご自身の今の職に就いた経緯を思い起こして頂けて、明日からの仕事への意欲が少しでも増せば、嬉しい限りです。

2. EXPO'70 へ行く

アジア初で日本最初の万国博覧会が1970年3月15日～9月13日に大阪で開催されることが決まったのが1965年9月。基本的なコンセプトやデザインが1966年にほぼ決まり、翌年からその宣伝が積極的に発信され始めました。筆者の父は、当時、大阪市立大学（現大阪公立大学）にて教鞭を取っていたので、大学で入手した万博情報を持って帰って筆者に渡してくれました。兵庫県伊丹市の小学校で3年生であり、既に理系であると自認していた筆者にはこの上なく刺激的なニュースであり、学校にそれらを持って行って友人らに見せびらかしました。「私物を持って来てはいけない」と注意した担任の先生



* Susumu KUWABATA

1958年5月生まれ
大阪大学 大学院工学研究科 応用化学専攻博士前期課程（1984年）
現在 大阪大学名誉教授、大阪大学 大学院工学研究科 フューチャーイノベーションセンター 特任教授 工学博士
E-mail: s.kuwabata.chem.eng@osaka-u.ac.jp

も、大阪での万博開催をそれで初めて知ったようで、「へ〜！」と感心して資料を返してくれた時は、何となく誇らしげな気持ちに浸りました。

いち早く EXPO'70 の情報を知る立場にあった「私こそ、万博に行くべき人間である」と勝手に思い込み、両親にも会場へ何度も行く事を宣言し協力をお願いしていました。ところが、開催前年の秋に、突如、血尿が出て病院へ連れて行かれると、急性腎炎と診断され即日入院。3か月後に退院しても、さらに3か月の自宅療養（絶対安静）。万博の楽しそうな宣伝をテレビで観ながら気持ちは焦るばかり。万博が始まった直後の新年度（1970年4月）から、小学校6年生として無理のない範囲で通学が許されました（体育は見学、遠足・修学旅行はドクター・ストップ）。不憫に思った両親は、強い直射日光を避けて（EXPO'70でもあった）夜間券で連れて行ってくれました。理系を自認していた筆者が興味を持った機械にカメラがあり、やっと行くことができる万博の思い出を筆者自身が残せるようにと、当時の廉価で人気のあったリコー製のオートハーフカメラを買って貰い、万博会場の広さに感激しつつ写真も撮りまくりました（図2）。

退院後も通院して尿や血液検査をしました。その結果で回復・悪化の様子がわかり、気持ちは浮き沈



図2. 筆者が初めて手にしたカメラ（実物）（左上）と、それで撮影した EXPO'70 の写真（右上の写真は会場での筆者）

みしていました。結果が良かった時に天気も気にしながら万博に連れて行って貰い、半年の間に3回入場しました。リコー館、コダック館、みどり館、英国館、イタリア館等、それほど並ばずに入れるパビリオンを楽しみましたが、長時間並ばなければならないアメリカ館やソ連館を入れることは無理で、宇宙大好き少年として無念の気持ちでありました。そして、後ろ髪を引かれる思いで EXPO'70 の閉会式の日を迎えました。

3. EXPO'70 の思い出

急性腎炎により万博を十分に楽しむことも諦め、加えて灘、甲陽といった進学校への入学も諦め、最も行きたくなかった地元の公立中学校、高校に体の調子を気にしながら通学しました。その間、家で楽しめるラジオ製作、最新オーディオ機器による音楽鑑賞や FM ラジオの録音（FM エアチェック）等を趣味としました。それらを通して、また万博で受けた強烈な刺激も残ったままであったがゆえ、「面白い研究をやりたい」という気持ちは高まるばかりで、家からそれほど遠くない大阪大学への入学に憧れ、自己流で受験勉強をやりました。その結果、1年間の予備校生活もありましたが、念願の大阪大学工学部応用化学科（当時）に合格しました。その時の感激と喜びは、一生忘れることはないでしょう。

早く研究をやりたい気持ちを抑えて学部1～3年は基礎勉強に時間を費やし・・・なんて書いたら恰好良いかもしれませんが、実際は友人らと合コン、合ハイ（今は死語？：合同ハイキングの略称）も楽しんで、4年生時の研究室配属では、第一希望であった電気化学の研究室（田村研究室）に配属されました。その時に研究室にて事務業務をやっていた方（通称：教授秘書）は、男子だらけの研究室に居る唯一の女性であり、彼女と話したり一緒に遊びに行ったりするのが、研究室の学生らの楽しみのひとつ。（EXPO'70 が開催された）吹田市に実家がある彼女に対して、筆者が当然考えるのが「万博に何回行ったか？」であり、その回答を引き出すために自分の残念な状況を話しました。そうすると「たった3回は残念やったね」と言うので、「そしたら、何回行ったの？」と質問。返ってきた「26回」との回答に唾然としました。ご両親が共働きで子供と遊ぶ時間が取れなかった時期に、家の近場で万博が開催

されたのを良い機会として、土・日曜はもちろんのこと、平日も両親が仕事から帰った後に夜間券で遊びに行った結果だとのこと。EXPO'70の話で意気投合した結果、卒業後に田村教授ご夫妻に仲人をお願いしてパートナーの関係に。

子供が生まれ、家が手狭になって引っ越しすることとなり、荷物を整理している時にお互いの万博グッズを見せ合うチャンスがありました。その時、万博会場のご近所さんであった最大のメリットを見せつけられました。最終日の9月13日、いよいよパビリオンを閉める時刻が近づくと、遠方から来られた方は電車等が混む事を考えて、それなりの時刻に退出。しかし、歩いてでも帰ることができる親子は、お気に入りの（筆者も入館を切望していた）ソ連館に居残り、ついに「本当に最後の客」となってコンパニオンの皆さんに見送られながら出口の方へ。すると、コンパニオンの一人が展示物の人形のひとつを取り上げ、彼女に記念品として手渡したとのこと（図3左）。もう陳列の必要が無いのだから、最後の客に進呈することは「無きにしも非ず」ですが、万博に十分に行けず不本意だった筆者にはあまりに羨まし過ぎて、素直に「良かったねえ」とは言えず、その代わりに出た言葉が「そんなん嘘や！こんな人形、どこにでもあるし」でした。それに対して彼女は「何を言われても、事実は事実。我々親子は知っている」と、いたずらっぽい顔で返されてしまいました。

筆者のグッズの中にも強力な武器があり、全パビリオンと全イベント等を写真で記録した永久保存版の万博記録本（参考文献）で、数千円の価格は小学



図3. 筆者の妻がソ連館で買った人形（左）と、筆者が持っていた本（参考資料）の141ページに掲載されていた「泥のお人形さん」とタイトルがついた写真（右）。

生の筆者には高価で両親に買って貰いました。それを「これは持ってないだろう」と自慢げに見せて、「では、ソ連館を見せてあげよう」とそのページを開けたとたんに彼女がひとつの写真を指差して「あ！私のお人形さん！」（図3右）。本当に驚きました。そして「わたしゃ、あんたが人形を買った証拠を示すためにこの本を買ったのか！」と、2人で大笑いしました。

こういう楽しい夫婦の会話を経て、お互いの万博に対する情熱を確認しつつ現在に至っております。もう一度引っ越しした今のマンションのバルコニーからは、EXPO'70の太陽の塔の後ろ姿や、夏には万博記念公園で打ち上げられる花火を見ることができます。子供が育って家を出たあとは万博記念公園の年間パスを購入し、公園内にある種々の草花の最盛期毎に2人で写真を撮りに行っています。しかし、今年の3月に年間パスが切れた時には、「さて、関西万博が終わるまでは、このパスは不要」ということで、今は季節も何も関係なく、大屋根リングを観に夢洲へ通っております。

4. 関西万博（EXPO2025）へ行っています

2025年に「いのち輝く未来社会のデザイン」とのテーマで、大阪で再び日本万国博覧会が開催されることが決定したのが2018年。そのニュースが入ってきたとたんに筆者は指を折って数えました。そして、妻に「今度の万博は、僕の定年後に開催するから心置きなく行けるゾ！」と。しかし、2019年の年末辺りから新型コロナ感染が大流行し始めた時、「万博までには終わって欲しい」と夫婦で話し合っておりました。その後、工学研究科にて評議員と工学研究科長を務め、その間に大阪大学工学研究科から関西万博へ出展するいくつかに関しては、契約書のサインをする係もやり、そのような度に、「いよいよ万博か」と感慨深いものがありました。ちなみに、それに直接関係していた研究者らは「万博が始まったら、真っ先に先生を招待します」とか言っておりましたが、2024年3月に定年退職した私の所へは、誰からも何の招待状も来ませんでした（笑）。

ちなみに、定年が近づいた時期に定年後の常勤職への誘いがありましたが、それを選んでしまうと、特に大阪から離れた所へ行ってしまうと、関西万博へ頻繁に行けなくなり、今度も妻に回数を越されて

自慢されるのかと思うと（こちらはジョークですが）、自然と断ってしまっていました。また、ニュース等で「パピリオンがまだ出来ていない」「こんなに人気がないなら、赤字になるかもしれない」とかを聞く度に、夫婦で「前の万博も開催前に同じこと言うてたやんなあ」と話をして、成功するのは当たり前という確信が揺るいだことはありませんでした。そして、当たり前のように通期パスを購入し、当たり前のようにテストランにも応募し、せっせと通い始めました。

関西万博に何度も行っていることを言うと、「そんなに楽しいのですか？」と聞かれますが、小学6年生の時とは異なり、色々な経験を済ませた人生後期の者としては、例えば、海外出張で行ったことのある国のパピリオンに入ると、「なんで、こんな陳列をしてるの？国の中にはもっとアピールできるものがあるよね？」とか「なんでこの国のここを主張してるの？もっと素晴らしい所があるではないですか」というような、開催側の目で見えてしまうことも多々あります。でも、筆者がそんなことを考えている隣で、小学生とか中学生に思える若い人たちが「これ凄い！」と言っているのを見ると、万博を訪れる人の主人公はやはりこれから活躍する人たちであり、年配者はそれを見守る係であることを感じざるを得ません。「関西万博」という非日常を楽しむのとともに、そういう若い人たちの驚きの顔を見ることが、繰り返し行く理由のひとつであるかもしれません。

5. おわりに

EXPO'70では、テレビ画面を触ると画像が変化したりスイッチがON/OFFする装置、ワイヤレスで通話できる電話や、地球の裏側にあるデバイスの操作できる最新式リモート装置等々の最先端技術が紹介されていました。超人気の陳列は、長蛇の列ができて病弱の小学生である筆者は経験できず、「い

つになったら普通の生活であれらを経験できるのだろうか？」と思っておりました。そして「やっと来たか！」と思えたのは筆者が2009年にiPhone 3Gを手にした時で、EXPO'70から約40年後でした。

奇しくも、この原稿を書いている時に、坂口教授（大阪大学）、北川教授（京都大学）のノーベル賞受賞のニュースが入ってきました。それぞれ滋賀県長浜市、京都府京都市がご出身。ともに1951年生まれで、おそらく大学で研究を始めた頃にEXPO'70へ行って刺激を受けたのではないのでしょうか？関西万博が開催されているこのタイミングに関西からお二人の研究者がノーベル賞を受賞されたことは、すごいタイミングです。関西万博を訪れた延べ2,900万人（含関係者）の中には、紹介された技術に驚き、そして日本人のノーベル賞受賞に刺激され、「いのち輝く未来社会」をデザインするために必要な課題を解決できる素晴らしい研究者となる人もいるかもしれません。EXPO'70で刺激を受け、阪大で45年間研究を楽しんだ者としては、それを願うばかりです。

ところで、本稿の締め切り日である10月11日に大学へ行く用事があり、関西万博にご自身の研究成果を陳列している教授と偶然に会いました。「私を招待してくれるって言ったのに」と、冗談交じりに話したところ、「申し訳ありません。最終日の10月13日にタイの研究者を招待していて私も行きますから、一緒に行きましょう」と、そのパピリオンの招待状を貰いました。ということで、事前抽選に当たらず、当日登録も外れまくって入れなかったパピリオンを楽しむべく、本稿を投稿してから最終日の関西万博へ行ってきま〜す！

参考文献

茅 誠司, 山田幸五郎, 高橋正人 監修「日本万国博ハイライトアルバム」 静山堂出版 (1970)

